

小林 勝著
鷗俊河原 安松
刑務所

ルポルタージュ 5
日本の証言

現在の会編

解説 鳥羽耕史 (早稲田大学文学学術院教授)
付録 『内灘——その砂丘にえがく新しい歴史』
定価 本体45,000円+税
ISBN978-4-906943-80-7

ルポルタージュ 1955年刊 現在の会編

日本の証言

復刻版 全9冊
+別冊1 +付録1

安部公房らが率いた若い作家や画家の集団「現在の会」。
会にとってルポルタージュの手法は現在から未来へと志向する糧であった。
彼らの戦後文学運動の到達点を、当時の造本のまま復刻！

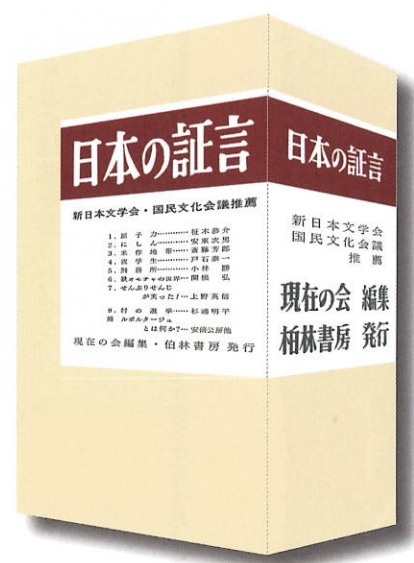
三人社



ルポルタージュ

日本の証言

限定80部



※この函に全冊を収納します。

- ◎収録内容
- 1 原子力 榎本恭介
 - 2 にしん—凶漁地帯を行く— 安東次男
 - 3 米作地帯—土の中に眠つてはいない— 斎藤芳郎
 - 4 夜学生 戸石泰一
 - 5 刑務所 小林勝
 - 6 鉄—オモチャの世界— 関根弘
 - 7 せんぷりせんじが笑った！ 上野英信
 - 8 村の選挙 杉浦明平
- 補 ルポルタージュとは何か 安部公房・他

- 復刻版概要
- ◎冊数 全9冊+別冊1+付録1
 - ◎体裁 新書判・並製(全9冊をオリジナル化粧函に収納)
 - ◎別冊 別冊及び付録はB6判・並製
 - ◎解説 解説と会員のルポルタージュ「ゴミのゆくえ」(遠藤周作他2名)と「アメリカ航路」(岡見裕輔)を収録
 - ◎鳥羽耕史(早稲田大学文学学術院教授)
 - ◎付録 『内灘—その砂丘にえがく新しい歴史』
 - ◎総頁数 約1,000頁
 - ◎定価 本体45,000円+税 ISBN978-4-906943-80-7
 - ◎推薦 小田三月・鈴木勝雄

現在 復刻版 全2巻+別冊1
1952年6月〜1955年9月
◎体裁 B5判・上製・総498頁
◎解説 鳥羽耕史
◎回想 小田三月
◎価格 本体30,000円+税
ISBN978-4-908147-27-2

株式会社
三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

※図書館様・書店様へ
小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

あの頃のこと

小田三月

一九五三年六月十五日、金沢の内灘海岸を接収した米軍が、試射弾を砂丘に撃ちこんだ。平和国家として出なおしたはずの日本に、再び硝煙が上がることを恐れた伊達得夫と真鍋呉夫は、さっそく現地に出かけた。このあと各地の反戦運動や労働争議の現場に、「現在」の会員たちが出かけ、ルポルタージュを書こうという気運が盛りあがった。二年を経て出来あがったのが「日本の証言」八冊である。

ルポルタージュという文学ジャンルは、それまで日本ではなじみの薄いものであったので、著者たちは、それぞれに方法を模索した。なかでも小林勝は、刑務所という閉鎖社会で懸命に創造力を発揮した人間の営みを克明に描いて、新しいリアリズムの文体を作りあげた。「せんぶりせんじ」もまた、炭坑夫として働きながら書く、新鮮な試みであった。

八冊が出そろった時に催した記念講演会の標題が「未来への出発」であったように、会にとってルポルタージュは、現在から未来へと志向する糧だった。これを機に会内では、方法についての勉強会が活発に行われるようになった。関根弘「アレゴリーについて」、針生一郎「プレヒトとスタニスラフスキー」などが、その例として記憶に残っている。

〈おだ・みつき 作家〉

五十年代ルポルタージュ運動の熱気を伝える 画文のバトル

鈴木勝雄

サンフランシスコ講和条約によって独立を回復したばかりの日本の五十年代に「ルポルタージュ」という新しい言葉が、今では想像できないほどの希望を託されて誕生した。それは社会的な現実から遊離してしまった文学者や美術家が、再び大衆との結びつきを回復しようとする運動でもあった。現場主義に根ざした細やかな観点から大衆の生活のそこかしこに潜む矛盾を可視化し、読者の認識の変革を目指したのである。

安部公房、関根弘、針生一郎、島尾敏雄などを中心とする〈現在の会〉が刊行したシリーズ「ルポルタージュ 日本の証言」は、まさにこのようなルポルタージュの旗のもとに結集した文学と美術の共同プロジェクトとして画期をなすものだ。「原子力」、「村の選挙」、「鉄—オモチャの世界」という三冊の挿絵を担当した池田龍雄は、印刷媒体に適したペン画のスタイルを発展させ、神経質な線条を重ねた独自の世界を生み出した。またシリーズ中もつとも成功をおさめた上野英信著「せんぶりせんじが笑った!」は、大らかなユーモアをたたえた炭鉱の絵師千田梅二の絵柄抜きには考えられないものだ。

ここに参加した画家は、文章の添え物としての「挿絵」に満足することなく、ときに文章を食ってしまいかねない個性を発揮していることに気づく。大衆に届くルポルタージュという課題は、画家にも新たな形式の探求を促したのである。その異ジャンルが競いあう緊張感には是非注目して欲しい。

〈すずき・かつお 東京国立近代美術館主任研究員〉



筑豊炭鉱から生まれた版画と小説と記録。私たちは何を教えられるか。

著 上野英信(うえの えいしん) 1923～1987
山口県生まれ 記録文学作家
絵 千田梅二(せんだ うめじ) 1920～1997
富山県生まれ 画家

刊行のことば

〈原本より〉

われわれは今、奪われた未来をとりかえすために、祖国の深部に向つて出発しようとしている。

言葉の靴をはいて——空をとぶ靴、地にもぐる靴。そこはしかし、まだ暗く、いたるところに目に見えない壁が張りめぐらされている。工場と工場の間、町と町の間、魂と魂との間に。

われわれは闇にむかつて光の薪を投げるもの。地図のないところにわれわれの地図を創りだそう。

原寸内容見本



背振千次(せぶりせんじ)の無口で無愛想なことときたら全く有名なもんだ。職場の仲間たちは誰ひとりほんとの名まえをよぶものはおらん。みんな「せんぶりせんじ」とよんでいる。それというのも千次の野郎、年がら年じう、ろくすっぽ口もきかず、笑顔ひとつみせず、まるでせんぶりを煎じてのんだような、にがりきつたつらをしていやがるからのことさ。

せんぶりせんじの野郎を笑わせきつたら一升おごろうとみんながカケの相談をはじめた時、先山の源助ぢいはいこう云ったもんだ。「骨おり損のくたぶれもうけだわい。なんか親の遺言でもあるにちがわん。奴の笑顔を見ようなんち、坑内でお天道さんをおがもうちうげなもんだわい。あたまのてっぺんから尻でもひつてみせんとこや」みんな大笑いをしてカケの話は尻のようにふっとんで消えてしまった。

24

7 せんぶりせんじが笑った! 上野英信



街を走っている本物の自動車は玩具にぞっくりだ。

私は動かない電車や、踏潰した馬に腹を立て